

論文

Digital Map を活用した『山海経』^{せんがいきょう} 五蔵山経^{ごぞうさんけい}の成立に関する考察

——「五蔵山経」の地理情報の可視化に基づく検証——

下 西 紀 子*

はじめに

中国古代の地理書とされる『山海経』という文献がある。本研究はこの文献の地理情報を Digital Map に可視化することにより、『山海経』五蔵山経を考察するものである。

『山海経』という文献は著者、成立年代などの定説がなく、また記載内容についても複数の性質が混在し、古来より荒唐無稽の書とされてきた。研究対象とする「五蔵山経」は、主に山河の名称や山岳間の距離が記述され、『隋書』経籍志などでは地理類に分類されている。しかし地理情報の他に動植物や鉱物の医薬的効能や呪術的用法、あるいは奇怪な動物や神々とその祭祀方法などの記述が混在することから神話、怪物事典とも称され、地理書以外の見方もある¹。

また『山海経』にはかつて「山海図」という絵地図が存在し、図解書であったことも伺える。東晋の詩人、陶淵明^{とうえんめい} (365-427) の「読山海経」に「山海図を流観す。」という句などの存在がその根拠となっている。しかし当時の「山海図」は既に失われ、現存するものは明・清代に描かれた図像が主である²。絵地図は思想や地理情報を図形で表現したものであり、そこにはある時代、ある社会のイデオロギーが内在している。失われた「山海図」も図形にしか表現され得ない情報を包含していたと考える。よって本研究は『山海経』が図解書であったことを重視し、『山海経』五蔵山経の地理情報の可視化、つまり再現図の作成という手段をもって「五蔵山経」の考察を試みるものである。

さて本稿では「五蔵山経」の再現プロセスを解説し、また再現図の検証から得た情報をもとに春秋戦国時代を成立年代の一端とする可能性を考察する。『山海経』の成立年代に定説はないが、概ね春秋戦国時代から前漢にかけて、複数の著者によって段階的に形成したものと見られている³。『山海経』の名称が最初に確認できるのは、前漢の司馬遷^{しばせん} (前 145- 前 86 頃) による『史記』大宛列伝で、また劉秀^{りゅうしゅう} (?-23) が『山海経叙録』に『山海経』を校訂したことを記しており、前漢にはその存在が認められる。しかし前漢以前の文献には記録はなく、成立年代の一端を春秋戦国時代とする根拠は諸説分かれる。これまで劉秀校訂本 (18 編) や『漢書』芸文志 (13 編) などに記録される『山海経』の編目数の相違、また各編の間に認められる記載体裁上の相違、重複記事、時代的矛盾などや他の文献との比較において検証されてきた³。本稿は再現図の情報から成立年代の一端を春秋戦国時代とする可能性にアプローチする。この「五蔵山経」の地理情報の検証から成立についての言及は、清代の畢沅^{ひつげん} (1781)、近現代では小川 (1928)、顧頡剛^{こけつこう} (1934) などが行い、地図上に再現まで試みたものは衛挺生^{えいていせい}・徐聖謨^{じょせいぼ} (1974)、張步天^{ちようほてん} (2004) によるものがある⁴。また森 (2000) は現実の地理を閑却する必要性を示し、地図上ではないが再現図から成立を考察している⁵。本研究も地図上に山岳を比定するものであるが、従来地図ではなく、Google Maps を用いる。Google Maps は Ajax (Asynchronous JavaScript+XML) 技術によるブラウザ上での地図のズームやスクロール機能を始め、API (Application Program Interface) を加えたカスタマイズ性により独自の地理情報のコンテンツ構築が可能である。

キーワード：デジタルマップ、山海経、五蔵山経、河西回廊、東西交易路

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006年度入学 表象領域

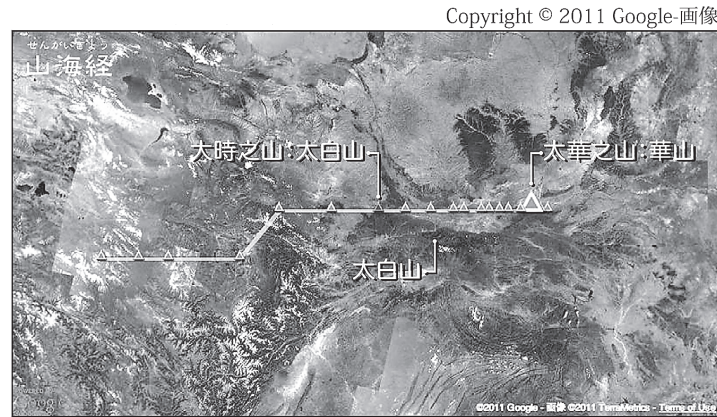


図 2. 西山首経 (1:1)

1-2. 記載距離と実測距離の「山岳間の比率」

「西山首経」には太華之山以外にも注釈者が山岳の所在を示している。その中の大時之山は、畢沅、郝懿行^{かくいこう}などが太白山と注しており、この山岳は河南省西部から陝西省、甘肅省東部におよぶ秦嶺山脈の最高峰であり、地図上の位置も明確である。この太白山と地図上に配置された大時之山との位置を比較すると少し距離があり、文献に記載されている距離⁸が実際の距離とは異なっている可能性が判明した。よって「太華之山⇔大時之山」と「華山⇔太白山」の山岳間の距離を利用し、「記載距離」と「実測距離」との比率計算を行った。「華山⇔太白山」の実測距離の測定は Google Earth で行い、直線距離で「約 235km」となった。また「太華之山⇔大時之山」の山岳間の記載距離は合計「1,032 里」で、換算すると「約 429.11km」⁹となる。記載距離と実測距離の比率は「 $429.11 \div 235=1.826$ 」となり、「約 1.83 倍」となった。

また計測可能な他の山岳間として南山に比定される終南山、天帝之山に比定される麦積山¹⁰を加え、4 山岳 6 山岳間の記載距離と実測距離の比率を平均した。それぞれ「太華之山⇔南山:3.25 倍」、「太華之山⇔天帝之山:1.86 倍」、その他「南山⇔大時之山:0.56 倍」、「大時之山⇔天帝之山:1.62 倍」、「南山⇔天帝之山:1.19 倍」で、これらの比率の相加平均をとると「約 1.72 倍」となる。1.72 倍した地図上に「西山首経」を配置すると、太白山と大時之山の位置が接近した(図 3)。この結果から『山海経』五蔵山経の記載距離は実際の距離より過大である可能性が示された。

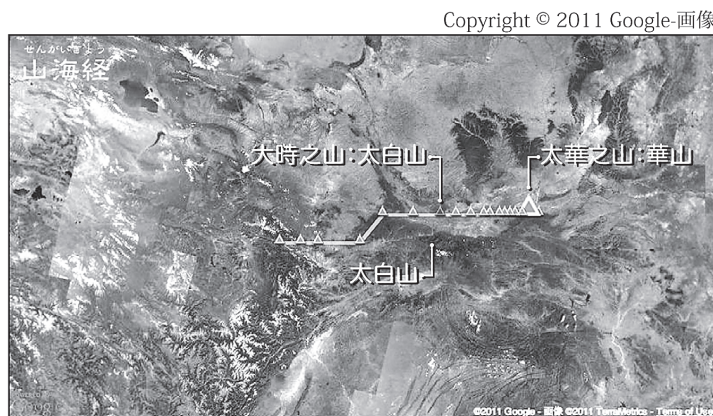


図 3. 西山首経 (1:1.72)

1-3. 記載総距離と加算総距離の相違による「山岳間の比率修正」

本文の各山経、および各山系の末尾に全体の総括があり、そこに山岳間の総距離が記載されている。この「記載総距離」と同じ山岳間の距離を加算して合計した「加算総距離」に相違が生じる。この相違は本文の脱落や別の文章の混入と見なされ¹¹、ひとつの山系に含まれる山岳間の比率を比較し、極端に比率が異なる山岳間を本文の脱落

や混入箇所として比率修正を行った。

「西山首経」の場合、「記載総距離：2,957里」、「加算総距離：3,117里」であり、その差は「-160里」となる。記載総距離と加算総距離をそれぞれ「西山首経」の19山岳で割り、山岳間の平均距離を出すと、「記載総距離：約156里」、「加算総距離：約164里」で、「-160里」の差は、だいたい1山岳区間の過多となる。つまり余分に「160里」の距離が混入していると考えられる。

また極端に比率が異なる山岳間は2箇所ある。他の山岳間は2倍以内であるのに対し、「太華之山(華山)⇔南山(終南山)」は「3.25倍」と比率が高い。また「南山(終南山)⇔大時之山(太白山)」では「0.56倍」と、他の山岳間より比率が低い。総距離の差から「160里」過多と考えられるため、比率が高い「太華之山⇔南山」が修正対象となる。この山岳間に「-160里(-66.528km)」を加え計算すると「 $(354.26 - 66.528) \div 108.84 = 2.6436$ 」¹²で、「約2.64倍」になり、他の山岳間との比率に近づく。

またこの山岳間を修正対象とすると「太華之山(華山)⇔大時之山(太白山)」、「太華之山(華山)⇔天帝之山(麦積山)」も修正対象の山岳区間を含み、修正すると「太華之山⇔大時之山:1.55倍」、「太華之山⇔天帝之山:1.68倍」となる。最終的に「西山首経」の平均比率は「1.54倍」となり、1.54倍した地図上に「西山首経」を配置すると、大時之山が太白山に天帝之山が麦積山にさらに接近した(図4)。またその位置関係を見ると河南省西部から陝西省、甘肅省東部の範囲となり、秦嶺山脈に近接していることが伺える。

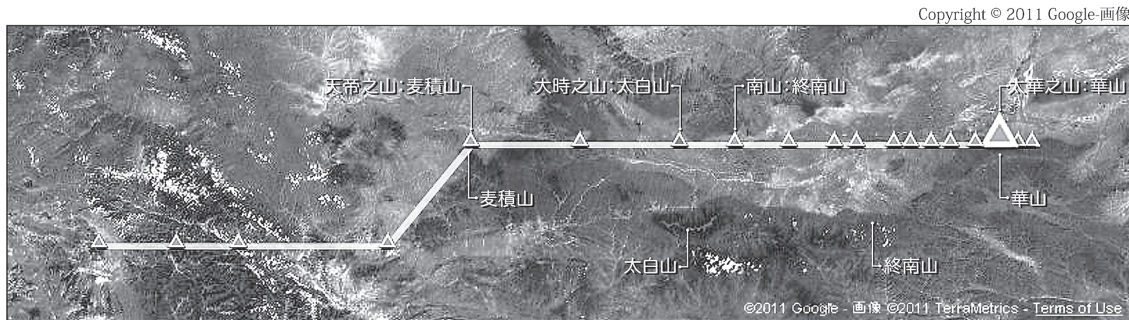


図4. 西山首経 (1:1.54)

「西山首経」という山系の再現プロセスを基本事例として紹介してきたが、他の山系を加え地図上に配置し、完成した再現図は図5となり、また各山系の最終比率は表1となる。

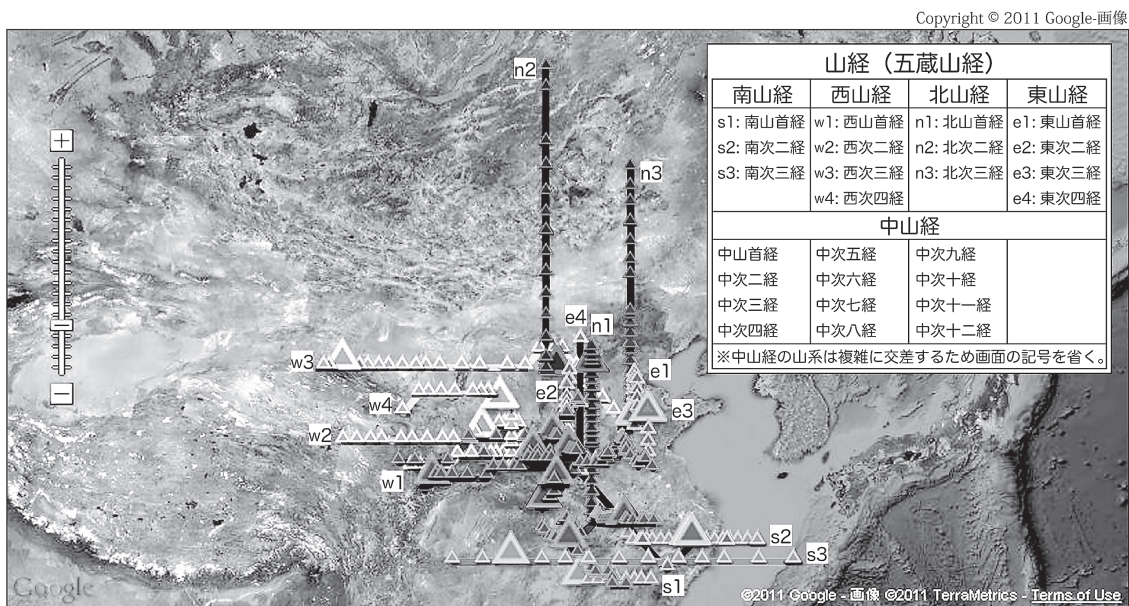


図5. 「五蔵山経」再現図

表 1. 最終比率

| 山系 | 最終比率 | | 山系 | 最終比率 | |
|------|--------|------|-------|--------|------|
| 南山首経 | 2.29 倍 | 44% | 中山首経 | 1.57 倍 | 64% |
| 南次二経 | 3.22 倍 | 31% | 中次二経 | 4.4 倍 | 23% |
| 南次三経 | 0.99 倍 | 101% | 中次三経 | 1.2 倍 | 83% |
| 西山首経 | 1.54 倍 | 66% | 中次四経 | 3.7 倍 | 27% |
| 西次二経 | 1.5 倍 | 66% | 中次五経 | 1.04 倍 | 96% |
| 西次三経 | 1.24 倍 | 81% | 中次六経 | 1.34 倍 | 75% |
| 西次四経 | 1.24 倍 | 81% | 中次七経 | 1.5 倍 | 67% |
| 北山首経 | 2.27 倍 | 44% | 中次八経 | 画像修正 | 85% |
| 北次二経 | 1.34 倍 | 75% | 中次九経 | 1.6 倍 | 63% |
| 北次三経 | 画像修正 | 48% | 中次十経 | 画像修正 | 65% |
| 東山首経 | 4.79 倍 | 21% | 中次十一経 | 画像修正 | 45% |
| 東次二経 | 画像修正 | 22% | 中次十二経 | 画像修正 | 100% |
| 東次三経 | 5.42 倍 | 19% | | | |
| 東次四経 | 画像修正 | 300% | | | |

この再現図の作成において、モデルケースはなく、再現そのものに試行錯誤を要し、繰り返し修正、調整を施した。紙媒体である従来地図では可視化した情報は固定されるが、Digital Map は地図および可視化した情報も可変である。このような機能がなければ、この再現図の作成は不可能であり、Digital Map の有効性を示すひとつの結果と考える。

1-4. 再現プロセスにおける所見

再現プロセスにおいて「山岳の位置比定」、記載距離と実測距離の「山岳間の比率」、また記載総距離と加算総距離の相違による「山岳間の比率修正」を行ったが、その試みから幾つかの所見を得た。

「山岳の位置比定」では図 6¹³のように、「南山経」は南方、「西山経」は西方、「北山経」は北方、「東山経」は東方、

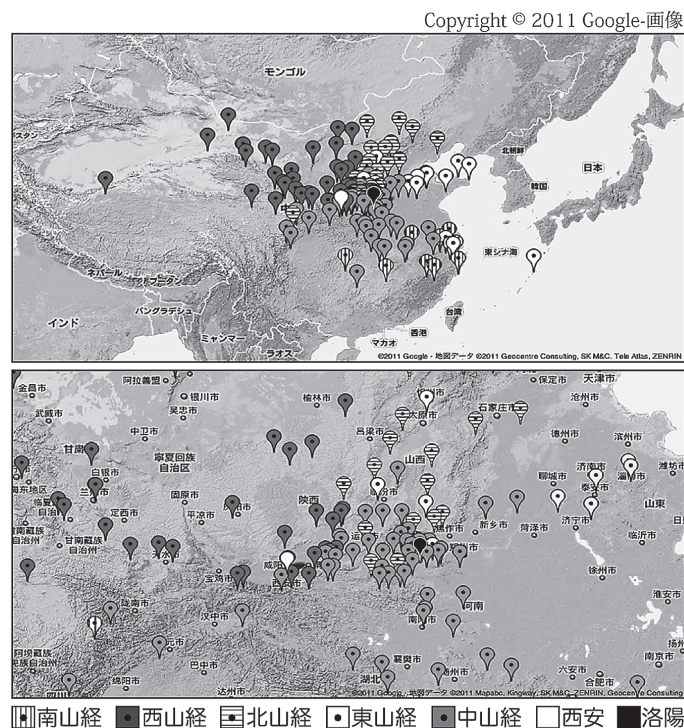


図 6. 山岳の位置比定

「中山経」は中央付近というように方位を示す名称と山岳の位置関係がほぼ適応している。また「西山経」、「中山経」の山岳が多く、比定できる山岳の情報がこれらの山経に多いことが伺える。これは「西山経」、「中山経」の情報精

度の高さを示すものと考えられる。また河南省の洛陽から陝西省の西安付近にかけて山岳数が多く、特に洛陽周辺の山岳密度が高いことを見ると、これらの地域と「五蔵山経」との関連性を伺わせる。

この「西山経」、「中山経」の情報精度に関しては、記載距離と実測距離の「山岳間の比率」、記載総距離と加算総距離の相違による「山岳間の比率修正」を行った際にも表れている。表1の最終比率に示されるように「南山経」、「北山経」、「東山経」の場合は、山岳間の比率が2倍以上になるものが多く、また比率に規則性らしいものは見受けられない。それに対して「西山経」、「中山経」の場合は、例外もあるが2倍以内の比率に収まるものが多いという傾向がある。また「山岳間の比率修正」においても、「南山経」、「北山経」、「東山経」は修正が修正として殆ど機能しなかったが、「西山経」、「中山経」は幾らか機能した。

これらの結果から「五蔵山経」の地理情報は「西山経」、「中山経」、つまり西方と中央の情報精度が比較的高いということが示された。

1-5. 「五蔵山経」再現図の主要地域

再現プロセスの所見から「西山経」、「中山経」の情報精度が高いことが示されたが、「五蔵山経」と関連する地域をより明確にするために点と線の再現図(図5)を領域地図に展開した。その際、領域的な広がりではなく、積載される重複地域に着目した。各山系は複雑に交差し、重なり合っており、最も重複する地域が「五蔵山経」に関連する主要地域と考えられる。よって各山経と山経全体での重複地域の抽出を試みた。

まず各山経の重複地域は図7となるが、全体的に見ると「中山経」の重複地域となる河南省を中心に各山経の重複地域が東西南北に展開されている。また地域的に見ると「西山経」、「北山経」、「東山経」、「中山経(河南省)」は概ね黄河流域、「南山経」、「中山経(湖北省)」は長江中下流域に区分することができる。黄河、長江流域は中国古代文明の発祥地であり、また甘肅省を除けば春秋戦国時代の国家領域とも似ている様相がある。

図8の山経全体の重複地域では、最も多く重複したのは「河南省:12」で、次いで「山西省:7」、「陝西省:6」、「甘肅省:6」となり、長江流域が外れ、黄河流域に該当する地域に絞られた。さらに地域の特徴で区分すると、河南省、山西省は中原¹⁴、陝西省は関中、甘肅省は黄河の西を意味する河西に該当する。よって中原、関中、河西、これらが「五蔵山経」における主要地域と考えられる。

中原は中華文化が形成された地域であり、その河南省の洛陽、また陝西省の西安も歴代王朝が首都とした国家の中心地である。これらとの関連性は図6に見られる「山岳の位置比定」でも示されていたが、注目すべきは河西と考える。中原や関中は中心であるが故に主要地域としては当然とも言えるが、地方である河西が主要地域となるのは何らかの特性と考えられるからである。その意味では河西が「五蔵山経」の最も注目すべき地域であり、河西の特性となるものが「五蔵山経」にも関わっている可能性がある。よって河西が如何なる地域かを見て行きたい。

Copyright © 中国まると百科事典

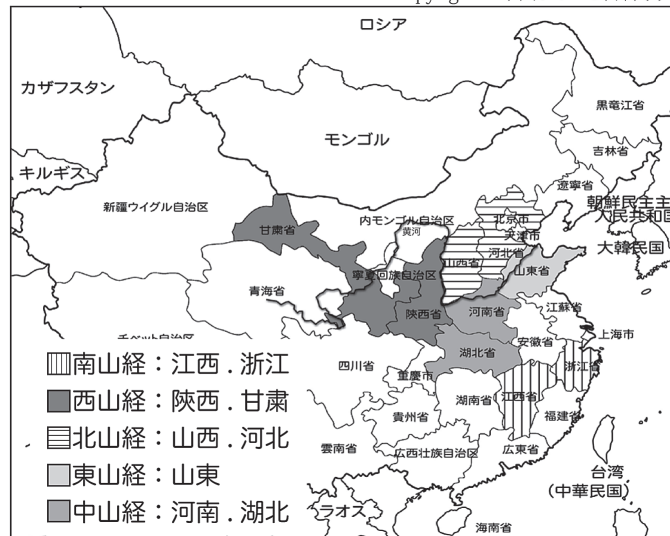


図7. 各山経の主要地域



図 8. 山経全体の主要地域

2. 河西地域の性質

2-1. 交易路としての河西地域

河西は黄河の西に位置する細長い通路という意味から、河西回廊、河西走廊とも呼ばれている。その名称から交通路という性質を備えた地域であることが伺える。西北、東南に走る細長い形状は南側にある標高 4~5,000m 級の祁連山脈に沿ったもので、北側にはトングリ砂漠、バダインジャラン砂漠が広がっている。高山と砂漠に挟まれた乾燥地帯であるが、祁連山脈の雪解け水を水源とするオアシス郡が列置し、また山脈の北麓には草原地帯が形成され、地勢的にも交通路としての機能を有していた¹⁵。

この地域が河西回廊と称されるまでに発展したのは、シルクロードとして知られる東西交易路としてである。シルクロードはドイツの地理学者リヒトホーフエン (Ferdinand von Richthofen 1833-1905) が中国と中央アジアなどとの絹貿易を結ぶ交易路に使用した語であるが、その概念は拡張され、アジアとヨーロッパを結ぶ古代の東西交易路の総称となっている¹⁶。代表的なシルクロードは3つに分類され、北方ユーラシアのステップ地帯を横断するステップルート、中央アジアの砂漠地帯をオアシスに沿って横断するオアシスルート¹⁷、東シナ海から東南アジアを迂回してインドを経由し、紅海、地中海に至る南海ルートがある。河西はオアシスルートの主要幹線で、シルクロードの東の起点となる西安や洛陽と西域のタリム盆地を結んだ。つまり河西は中国と西域、国内と国外を繋ぐ交易路の要衝であった。

この河西が中国の領域となったのは前漢第7代皇帝、武帝 (在位: 前 141- 前 87) の時代であり、武帝の命により張騫 (?- 前 114) が西域に派遣されたことが契機となり交易路が開かれたとされる。前 2 世紀頃、河西を含めモンゴル高原を中心とした中央ユーラシア東部には匈奴という遊牧騎馬民族が大勢力を築いており、周辺諸国にもその影響を及ぼしていた。張騫の西域派遣はこの匈奴対策の一環として行われたものである。

『史記』大宛列伝に「匈奴は月氏王をうち破り、その頭骨を酒の器とした。月氏は逃れ去ったが、いつまでも匈奴を恨んで仇敵と考えている。」¹⁸ との匈奴からの投降者の記述がある。この情報を得て攻守同盟を結ぶために中央アジアのソグディアナ地方にいた月氏への使者として張騫は派遣された。しかし月氏は大月氏としてその地に安住し

ており、もはや匈奴への復讐心もなく同盟は成立しなかった¹⁹。交渉は決裂したが、張騫により西域から中央アジアに至る情報がもたらされ、その情報は匈奴対策のみならず、西域や中央アジア諸国との交易を促すことになる。そして前121年に河西の匈奴を駆逐し、それ以後に前漢の直轄地として統治され、河西はオアシスルートの要衝として発展する。

2-2. 河西地域の争奪と交易

河西が中国の版図として表れるのは、武帝の時代であり、率直に考えると河西は前漢の特徴ということになる。歴史地図の比較でもそれは顕著に示される(図9)。春秋、戦国、秦と中原から徐々に周辺へと領域が拡張されて行くが、前漢でも全体的な広がりを見せながら、西北の河西、そして西域のタリム盆地が突出しているのが目立っている。

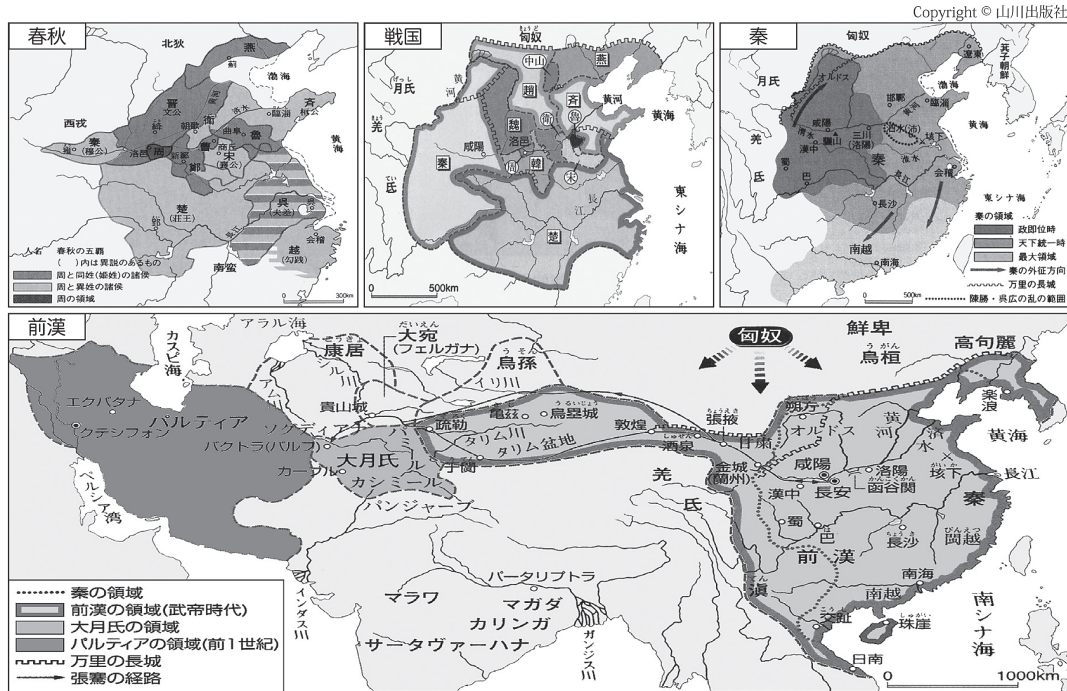


図9. 歴史地図(春秋・戦国・秦・前漢)

これは匈奴の勢力圏を前漢が意図的に奪取したことに他ならないのであるが、その背景には河西が中国と西域を結ぶ交通路としてのみではなく、交易路であったことが関与すると考える。つまり、この河西の交易路としての機能は前漢に構築されたものではなく、既にその機能を果たしており、その実績があったからこそ匈奴から奪い取ったのではないだろうか。

実は匈奴も月氏という遊牧民族からこの地域を奪い取っている。『史記』匈奴列伝に「今、小役人が条約を破ったことで、右賢王を罰し、西方に赴かせ月氏を攻撃するよう命じた。... 月氏を滅亡させ、全員を斬殺し降服させた。楼蘭・烏孫・呼揭および近辺の二十六国を平定し、すべて匈奴の領土とした。」²⁰とある。これは前176年に匈奴の冒頓単于(在位:前209-前174)が前漢第5代皇帝、文帝(在位:前180-前157)に宛てた書簡で、そこには月氏から河西を奪取し、さらに西域のタリム盆地を匈奴が勢力圏に治めたことを伝えている。

また『史記』大宛列伝には張騫の西域派遣の帰朝報告が記され「最初、月氏は敦煌と祁連山の間にいたが、匈奴に破れてから、遠くへ逃れ、大宛(フェルガナ)を通過して西方に向かい、大夏(バクトリア)を攻撃してそれを支配した。ついに氐水(アムダリア)の北に住んで根拠地とした。」²¹としている。月氏はかつて「敦煌と祁連山の間」、つまり河西をその故地としていたが、前176年頃、匈奴によって西遷を余儀なくされたことが記されている。これらの記述から匈奴に敗れる以前、河西は月氏の勢力圏であり、それを匈奴が奪取したことが伺える。

またこの月氏は他国から輸入したものを別国に輸出するという中継交易を行っていたとされる。この中継交易は

遊牧民族が生活する乾燥地帯（ステップ、オアシスなど）という環境が大きく関与している。ステップは水源に乏しい荒野であり、農耕より牧畜に適しているが、気候の激変や疫病による家畜の斃死という危険性を孕んでいる。またオアシスは砂漠地帯にある可耕地であるが、水源に限度があり、耕地は一定の面積以上には拡大できない。生活を補うために不足する物資を求めることが必然となる。しかし、このような地域では物資補給の代償がなく、交易によって得た物資を他に継送して、利益を得るしか方法がなかった。中継交易こそが乾燥地帯の生活者に発展をもたらす手段となったのである²²。つまり、乾燥地帯である河西では月氏が中継交易を営んでおり、匈奴は交易による経済的利権を得るために月氏から河西を奪ったものと考えられる。

また前漢においても同様に考えられるのではないだろうか。張騫の西域派遣は月氏との攻守同盟とされているが、西遷した月氏を再び前漢との西境に復帰させ、中継交易を復活させようとしたという見方もある²³。また張騫が西域の烏孫を河西に招致することを提案しているが、その失敗をもって、ようやく河西の直轄領化に乗り出している²⁴。この烏孫招致についても中継交易の荷い手としての期待があったものと考えられ、河西における遊牧民族の中継交易の実績を示すものと考えられる。

前漢における公的な交易が河西との関連を強調しているが、河西の交易路としての機能に着目すると前漢以前にも遊牧民族によって構築された形跡が伺え、河西の性質は必ずしも前漢のみの特徴ではないという見方ができる。これによって、Digital Map による再現図から主要地域として着目した河西が交易路という性質を備え、そしてその機能は、前漢に限定されるものではないことが明らかとなった。

3. 「五蔵山経」の成立に関する考察

「五蔵山経」再現図から主要地域として抽出された河西に注目したが、その地域は交通路としての性質を備えている。また前漢に交易路として発展したが、しかしそれ以前からその機能を果たしていた可能性が伺える。交易路として機能していた場合、版図に表れない時代からその地域は交易路の要衝として既知であった可能性がある。そして、その情報が「五蔵山経」に反映したと考えられなくはない。

この交易によって河西の情報が「五蔵山経」に反映したという観点を仮説として、河西における交易が春秋戦国時代までおよそ可能性があるかを検証したい。それが再現図から得た情報により「五蔵山経」の成立に春秋戦国時代が関わる可能性にアプローチするものとする。

3-1. 春秋戦国時代における交易

春秋戦国時代は東周王朝期とも言えるが、その前半である春秋時代（前 770- 前 476）には春秋五覇と呼ばれる覇者となった諸侯、後半となる戦国時代（前 475- 前 221）には戦国七雄と呼ばれる列強国が出現するなど、各地の諸侯などが覇者から王と称するまで権力を持った下克上の時代である²⁵。以後、前 221 年に秦の始皇帝による全国統一が果たされるまで滅国兼併を趨勢とする戦乱の時代が続くことになる。

このような社会的状況下において各国では富国強兵が推進されるが、軍事力強化のために経済発展が促され、この時代に商工業が発展している。その背景には鉄器による農業や手工業の生産力向上が関係する。中国では前 5 世紀頃の春秋末期に、鑄造による農具類、また工具類が使用されていた。鉄製農具類は戦国末期までには一般的に普及したと見られている²⁶。鉄器の普及により農業や手工業では余剰生産物が発生し、それが物資の流通を促し、商工業の発展に貢献したと考えられる。

商工業発展の痕跡は文献にも示される。『春秋左氏伝』莊公に「衆車純門より入り、達市きしに乃ぶ。」²⁷とあり、達市は城内の道沿いの市と解され、春秋時代の都市に市場が形成されていたことが伺える。また『戦国策』齊策には「臨淄の途は、車の轂こくが撃ちあい、人とびとの肩はすれあい、枉えりを連ねると幃いとなり、袂たもとをあげると幕となり、汗をはらえば雨となる。」²⁸とある。『太平御覧』車部五轂かんとんに引く、桓譚『新論』には「楚の郢都は、車の轂が撃ちあい、人とびとの肩はすれあい、城市の道は縦横に交錯する。朝に衣を新たなるも、夕暮には衣が弊える。」²⁹など、戦国の都市における市場の盛況が伝えられる。

こうした市場には農業や手工業などの生産者のみではなく、物資の流通に専門的に介在し、利潤を得る商人が関

係していた。春秋の歴史書とされる『国語』齊語には「かの商人は群集して一処に住居させ、四季の需用を観察し、その地方の物質を観察して、その市場の値を知り、荷物を背負ったり、かついだり、かかえたり、かかげたり、また牛馬や馬車で運び、四方にどこでも行って、有無相通じ、安く買って、高く売る。」³⁰とある。また『史記』貨殖列伝には、巨万の富を築いた豪商の記述があり、勢力を持った商人が各国の都市に存在したことが伺える。越王勾踐 (?-前 465) の名臣であった陶朱公 (范蠡) は齊や宋の陶、孔子 (前 551 頃 - 前 479) の弟子である子貢 (前 520 頃 - ?) は曹や魯、白圭は周で投機的な商売によって成功したとある。その他、魯の猗頓、趙の郭縱、曹の邴氏、齊の刁間、周の師史、蜀の臨邛に移動した趙の卓氏、齊の程鄭、南陽へ移動した魏の孔氏などの記述がある³¹。この各国の都市の商人が、交通の要衝となる都市、或いは物資の生産地を拠点とし、その地を交易の要衝として発展させたと考えられる。

また交易は国内に留まらず各国の都市におよび、商人は各国を往来し、交易を行っていたことが注目される。「貨殖列伝」に、子貢は「四頭立ての馬車に乗り、騎馬のお供をしたがえ、帛の束を贈り物として、諸侯と交際し、どこへ行ってもその国の君主は、かれと対等の礼儀で迎えた。」とあり、師史の場合は「運送の車は何百とあり、群や国への取引は、どこまでも行かぬことはなかった。」³²とある。

この国家間の交易は出土している貨幣によっても示される。中国において金属貨幣の出現は前 5 世紀頃で、前 4 世紀に小型化し貨幣量も増加しており、金属貨幣の使用は春秋に始まり、戦国時代には貨幣経済がほぼ定着したと見られている。戦国時代の銅貨は韓・魏・趙などで流通した布銭、齊・燕の刀銭、楚の銅貝、秦の円銭などがあった³³。秦、齊、楚では他国貨幣の出土事例は少ないが、燕、趙では刀銭と布銭が、中原諸国では銅貝以外の貨幣がすべて出土しており、他国貨幣の流通が伺える³⁴。

以上のように春秋から戦国にかけて商工業が発展し、商人や貨幣を介した各国および各国家間での交易が認められる。では河西の場合はどのような状況であったのか、春秋戦国時代における河西での交易の可能性を見て行きたい。

3-2. 月氏との関連による河西地域の交易

「大宛列伝」に「最初、月氏は敦煌と祁連山の間にいた」とあり、秦の勢力圏である東南部³⁵を除く河西は月氏の勢力圏であったと考えられる。この月氏は中継交易に従事していた形跡があり、春秋戦国時代にその存在が確認できれば、この地における交易の証明ともなるが、残念ながらそれを示す資料がない。月氏が記録に登場するのは匈奴の冒頓単于に関連してであり、冒頓が即位した前 209 年頃、つまり秦代には存在したということが確認できるのみである。

ただ月氏には異名があると見られ、それを採用すれば時代を遡る可能性がある。『管子』揆度に「北は禹氏の玉を用い」、「禹氏の辺山の玉は一策なり」とあり、その他にも「玉は禹氏に起る」、「禹氏が来朝せざれば」など禹氏の名称が散見される。また『管子』地数には「夫れ玉は牛氏の辺山より起る」とあり、牛氏という異名も確認できる³⁶。

禹氏や牛氏が月氏の異名とされるのは、まず月と禹、あるいは牛の字音が近く、音訳による異字と見なされている³⁷。また「禹氏の玉」は慣用語であり、古代中国人が珍重した軟玉との関連からも月氏の異名として捉えられる。軟玉の原産地は西域のホータンであるが中国と西域を結ぶ河西を占有していた月氏が軟玉を運ぶ有力な中継者となったと考えられ、玉との関連が示される禹氏、牛氏も月氏の異名となるのである。そして、この中継交易によって中継地が原産地と誤認され、月氏は玉の民として「禹氏の玉」という慣用語が生じたとされる³⁷。

また玉との関連において月氏、禹氏とは中央アジアで玉を意味する「qasch」、「gusch」の音訳との見方がある³⁷。『韓非子』和氏に「和氏の璧」³⁸という有名な故事があるが、この和氏も玉の音訳であり、月氏の異名とする説もある^{37・39}。これら異名が記載される『管子』の成立年代は戦国から前漢、『韓非子』は戦国であり、異名が月氏を指すとすれば、戦国時代には月氏は玉の民として河西で中継交易を行っていたと考えられる。

さて月氏は玉の民だけではなく西方ではセレス (seres)、つまり絹を産する絹の民として認識されていた。ギリシャの地理学者のストラボン (Strabon 前 63 頃 - 23 頃) が引く、アポロドロス (Apollodoros 前 180 頃 - ?) の逸文に前 200 年頃の東方の民族としてフリユノイ (匈奴) とセレスが併称され、当時の中央アジア形勢からセレスは甘粛や西域の住民、特に月氏に相当するとされる⁴⁰。本来セレスは絹の原産国である中国を指すものであるが⁴¹、やはり中継交易における誤認によるものと見られる。つまり月氏は東方では玉の民、西方では絹の民として知られていた。

東方に送られたホータンの軟玉と西方に送られた絹が河西における交易を示すひとつの事実になると考え、秦代以前の考古資料に着目した。まず絹は、アルタイ山脈北方にある前5-前3世紀頃のバジリク遺跡が有名であるが、絹は戦国時代のものとされる。月氏の古墳との見方もあるが⁴²、河西を経由しないステップルートの経路に位置する。また近年にはウルムチ市南山の薩恩薩伊古墓から絹が出土し、発掘された墓は前8-前5世紀頃のものと推定され、春秋時代に相当する⁴³。ウルムチは河西を経由するオアシスルートの天山北路に位置している。

一方、明確にホータン産とされる玉は、殷代（前1200年頃）の殷墟婦好墓、戦国時代（前4世紀末）の中山王墓から出土している⁴⁴。殷墟婦好墓は河南省安陽、中山王墓は河北省平山にあり、玉がホータン産とすればオアシスルートの天山南路南道から河西を経由し、中原を経て運ばれた可能性がある。これらの遺跡や遺物と月氏との関連は不明であるが、河西をルートとした交易は早い時代から存在したことを伺わせる。

むすび

『山海経』五蔵山経の再現図により主要地域として抽出され、着目した甘粛省（河西）は、古代中国では辺境であり、その地が主要地域となることが「五蔵山経」のひとつの特性であると考えられる。その甘粛省は河西回廊とも称され、中国と西域を結ぶ交通路、交易路の要衝であった。交易路として発展し、中国の版図となったのは前漢の武帝の時代であるが、それ以前は匈奴、さらに遡ると月氏という遊牧民族の勢力圏であった。

月氏は中継交易により繁栄していた形跡があり、その経済的利権を得るために匈奴がその地を奪取し、また前漢もその利権を求めて侵略したと考えられる。これは河西における武帝以前の交易の可能性を示すものであり、既に河西で交易が行なわれていたとすれば、その情報が「五蔵山経」に反映し、主要地域として抽出された可能性がある。

『山海経』の成立年代に定説はないが、概ね春秋戦国時代から前漢にかけて複数の著者によって段階的に形成したと見られている。しかし前漢以前の文献から『山海経』の記録は確認できず、春秋戦国とする根拠は諸説分かれる。本稿は、この交易によって河西の情報が「五蔵山経」に反映したという仮説から、春秋戦国時代の河西における交易の可能性を検証することで、成立年代の一端を春秋戦国とする根拠に再現図の情報からアプローチするものとなる。尚、この仮説形成はDigital Mapというツールの活用によるものである。Digital Mapは可視化した地理情報を階層化することが可能であり、その階層構造による情報の集積によって「五蔵山経」の再現図から主要地域を抽出するという着想を得ている。主要地域として抽出した河西、その交易路という特性が仮説を導いたことは既述したが、その背景にDigital Mapというツールの活用が貢献したことを加えておく。

さて仮説による春秋戦国時代における交易の検証であるが、まず中国の各国家では、春秋から戦国にかけて富国強兵や鉄器の普及により農業や手工業の生産力が向上し、商工業が発展している。戦国時代には商人が勃興し、各国の都市を往来することで、都市や交易路が発展した。そこには貨幣の流通も見られ、全国規模での交易が確認できる。

また河西でも月氏による中継交易が認められるが、記録では秦代以降しか確認できない。しかし月氏の異名を採用すれば異名が記載される文献の成立年代から戦国時代までは遡れる可能性が生じた。また中継交易による原産地と中継地の誤認から月氏は東方では玉の民、西方では絹の民として認識され、玉と絹を主に交易を行っていたことが判明した。秦代以前の玉と絹の考古資料に着目すると月氏との関連は追究できないが、古来より河西を経由した交易が行われていた痕跡が示された。河西の状況からみると月氏が春秋時代に関与したという判断は難しいが、戦国時代には各国と河西の月氏による交易が行われていた可能性が示唆される。つまり戦国時代には交易に関連して河西の情報が国内にもたらされていた可能性が考えられる。

以上のように再現図から主要地域として抽出された河西の特性、つまり交易路という性質に着目し、交易がもたらした情報が「五蔵山経」に反映したという仮説から捉えると、中国各国と河西との交易は戦国時代には成立している可能性があり、『山海経』五蔵山経には戦国時代の情報が含まれ、それは成立にも関連するものと推察される。

注

- 1 前野直彬『山海経・列仙伝』集英社, 1975, pp.15-19
- 2 明: 胡文煥『山海経図』、蔣応鎬『山海経(図絵全像)』/清: 呉任臣『増補絵像山海経広注』、汪紱『山海経存』
- 3 伊藤清司『『山海経』研究上の一課題』(『史学』55(1), 三田史学会, 1985, pp.1-17)、小南一郎『『山海経』研究の現状と課題』(『中国 - 社会と文化』2, 東大中国学会, 1987, pp.221-225)
- 4 畢沅『山海経新校正』1781、小川琢治『支那歴史地理研究』弘文堂書房, 1928、顧頡剛『五蔵山経試探』(『史学論叢』第一冊, 北京大学潜社, 1934)、衛挺生・徐聖謨『山経地理圖考』華岡出版部, 1974、張歩天『山海経解』天馬図書有限公司, 2004
- 5 森和『『山海経』五蔵山経の世界構造』(『史滴』(22), 早稲田大学東洋史懇話会, 2000, pp.2-17)
- 6 前野, 前掲書, pp.78-81
- 7 晋: 郭璞『山海経』/明: 楊慎『山海経補註』、王崇慶『山海経釈義』/清: 呉任臣『山海経広注』、汪紱『山海経存』、畢沅『山海経新校正』、郝懿行『山海経箋疏』/現代: 袁珂『山海経校注』など。
- 8 『山海経』には山岳間の里程が記載されるのみで、その計測手段などは記されていない。
- 9 換算は戦国・秦・漢尺「1里=1800尺」、「1尺=約23.1cm」を採用。
- 10 衛, 前掲書, p.24「假定其山之中心在今鳳高五千尺、由此而西行三百五十里則天水縣之高山也(麥磊山與馬蘭山脈、高六千尺)。」
- 11 前野, 前掲書, p.55, 68
- 12 (山岳間の加算距離+差) ÷ 山岳間の実測距離
- 13 付近や予測など曖昧な位置比定を含む。
- 14 河南省一帯を指したが、漢民族の発展に伴い華北一帯(山東省西部、河北省、河南省、山西省南部、陝西省東部)を指す。
- 15 前田正名『河西の歴史地理学的研究』吉川弘文館, 1964, pp.1-9
- 16 長沢和俊『張騫とシルクロード』清水新書, 1984, pp.15-19
- 17 オアシスルートは敦煌のハミを起点に天山山脈の北側「天山北路」、南側「天山南路」がある。「天山南路」はタリム盆地の北「天山南路北道」、南「天山南路南道」に分かれる。
- 18 司馬遷・小川環樹訳『史記列伝5』岩波書店, 1975, p.75
- 19 小谷仲男『大月氏 - 中央アジアに謎の民族を尋ねて』東方選書, 2010, p.28, 34
- 20 司馬遷・小川環樹訳『史記列伝4』岩波書店, 1975, p.38
- 21 司馬・小川訳, 前掲書 5, p.79
- 22 石母田正『古代史講座 13 古代における交易と文化交流』学生社, 1966, p.147
- 23 松田寿男『中央アジア史』弘文堂, 1955, p.44
- 24 長沢, 前掲書, p.106
- 25 春秋戦国の年代は「夏商周断代工程」による。
- 26 潮見浩『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館, 1982, pp.15-44, 90
- 27 鎌田正『春秋左氏伝 1 新釈漢文大系 30』明治書院, 1971, pp.227-228
- 28 林秀一『戦国策 上 新釈漢文大系 47』明治書院, 1977, p.377
- 29 李昉等奉勅撰『太平御覧 4』大化書局, 1977, p.3441
- 30 大野峻『国語 上 新釈漢文大系 66』明治書院, 1975, p.318, 320
- 31 司馬・小川訳, 前掲書 5, pp.150-179
- 32 司馬・小川訳, 前掲書 5, p.155, 171
- 33 山田勝芳『貨幣の中国古代史』朝日選書, 2000, p.11, pp.30-37
- 34 矢沢忠之『戦国期三晋地域における貨幣と都市 - 方足布・尖足布を中心に -』(『古代文化』60(3), 古代学協会, 2008, p.34)
- 35 『匈奴列伝』に春秋の秦の穆公が甘粛省東南部などの西戎八ヶ国を服属させたことが記される。
- 36 遠藤哲夫『管子 下 新釈漢文大系 52』明治書院, 1992, p.1159, 1229, 1238, 1253, 1303
- 37 江上波夫『江上波夫文化史論集 5 遊牧文化と東西交渉史』山川出版社, 2000, pp.300-307、桑原隲蔵『桑原隲蔵全集 3 支那法制史論叢 東西交通史論叢』岩波書店, 1968, p.266、小谷, 前掲書, pp.22-23
- 38 竹内照夫『韓非子 上 新釈漢文大系 11』明治書院, 1960, pp.154-159
- 39 その他『逸周書』: 禹氏、『穆天子伝』: 禹知、『山海経』: 月支国
- 40 江上, 前掲書, p.304
- 41 長沢, 前掲書, p.34「新石器時代の遺跡から絹が出土、殷墟文字に繭や桑の字が見える。」中国では古来より養蚕が行われていた。
- 42 護雅夫『東西文明の交流 1 漢とローマ』平凡社, 1970, pp.191-193

- 43 新疆哲学会科学網, 2011.12.19 http://big5.xjass.com/ls/content/2010-03/18/content_138741.htm
44 川又正智『漢代以前のシルクロード - 運ばれた馬とラピスラズリ』雄山閣, 2006, p.55

図版

- Google Maps, 2011.12.19 <http://maps.google.co.jp/> (図 2, 3, 4, 5, 6)
中国まるごと百科事典, 2011.12.19 <http://allchinainfo.com/> (図 7,8)
成瀬治他監修『山川世界史総合図録』山川出版社, 1994, p.20, 22 (図 9)
佐藤次高他『詳細世界史 改訂版』山川出版社, 2011, p.73, 76 (図 9)

参考文献

- 岩田重雄「先秦時代の中国における歩と里の長さ」(『計量史研究』3 (1), 日本計量史学会, 1981, pp.26-34)
海野一隆『東洋地理学史研究 大陸篇』清文堂, 2004
大野圭介「朴齋主页」2011.12.19 <http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/chubun/ohno/>
貝塚茂樹・伊藤道治『古代中国』講談社, 2000
柿沼陽平『中国古代貨幣経済史研究』汲古書院, 2011
郝懿行『山海経箋疏』台湾中華書局, 1979
影山剛「中国古代帝国における手工業・商業と身分および階級関係」(『歴史学研究』(328), 青木書店, 1967, pp.1-10)
呉承志・劉承幹『山海経地理今釈』求恕齋叢書, 1922
佐原康夫『漢代都市機構の研究』汲古書院, 2002
沢田勲『匈奴 - 古代遊牧国家の興亡』東方書店, 1996
平勢隆郎『都市国家から中華へ (殷周春秋戦国)』講談社, 2005
茅盾・伊藤彌太郎訳『支那の神話 (中国神話研究 ABC)』地平社, 1943
松田寿男『東西文化の交流』講談社, 2005
松田稔『『山海経』の基礎的研究』笠間書院, 1995
松丸道雄他『中国史 1 先史 - 後漢 (世界歴史大系)』山川出版社, 2003
初山明『漢帝国と辺境社会 - 長城の風景』中公新書, 1473
楊立国「中国春秋戦国期における商品経済の歴史的生成」(『季刊経済理論』41 (3), 経済理論学会事務局, 2004, pp.75-84)
吉本道雅「山海経研究序説」(『京都大學文學部研究紀要』46, 京都大学, 2007, pp.27-68)

A Study on the Age of the Formation of "The Five Classics of Mountains" of the *Shanhaijing* Based on a Digital Map: Examining a Visualization of Geographical Information

SHIMONISHI Noriko

Abstract:

Although the *Shanhaijing* [The Classic of Mountains and Seas] is one of the most important documents in the study of ancient China, it is unclear when it was created. This paper focuses on the "The Five Classics of Mountains," which is the main section in the *Shanhaijing* for covering geographical information. More specifically, the paper attempts to restore, by means of a digital map, the geographical information described in "The Five Classics of Mountains," and to analyze the restored map to investigate existing theories on the formation of the *Shanhaijing*. According to the restored map, we can identify that one of the major areas of "The Five Classics of Mountains" is the Hexi Corridor. Extending northwest from the Yellow River, the Hexi Corridor was used as a major east-west trade route from ancient China. It has been considered that the Hexi Corridor was used for trade by the Yuezhi people from the time of the Warring States Period at the least. Therefore, it can be concluded that "The Five Classics of Mountains" of the *Shanhaijing* existed in some form during the Warring States Period, because it contains much geographical information related to a major trade route of that period.

Keywords: digital map, *Shanhaijing*, "The Five Classics of Mountains," Hexi Corridor, east-west trade route

Digital Map を活用した『山海経』五蔵山経の成立に関する考察 ——「五蔵山経」の地理情報の可視化に基づく検証——

下 西 紀 子

要旨:

中国古代の地理書とされる『山海経』という文献がある。本研究は『山海経』が「図解書」であったことを重視し、この文献の地理情報をデジタルマップ (Google maps) にビジュアライズすることにより、『山海経』五蔵山経を考察するものである。

本稿ではまず「五蔵山経」の再現プロセスを解説し、また再現図の検証から得た情報をもとに「五蔵山経」の成立に関する考察を試みる。『山海経』の成立年代に定説はないが、概ね春秋戦国時代から前漢にかけて、複数の著者によって段階的に形成したものと見られている。しかし前漢以前の文献からは『山海経』の存在は確認できず、春秋戦国時代とする根拠は諸説分かれる。この成立年代の一端を春秋戦国時代とする可能性について「五蔵山経」再現図からアプローチを試みる。